

ファイザー企業市民レポート

2011年の社会貢献活動をご報告します

2011



被災者のこころのケアを担う医療関係者を継続して支援

東日本大震災 こころのケア支援プロジェクト

新たな10年、新たな展開を見つめて

第11回ヘルスケア関連団体(VHO)ワークショップ開催

12年間で総額5億2,555万円、国内最大級の助成

ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援





Working together for a healthier world™
より健康な世界の実現のために



ファイザーのスローガン「Working together for a healthier world より健康な世界の実現のために」は、病と闘う患者の皆様や医療従事者の皆様の信頼に応え、革新的な治療薬の開発に専念するだけでなく、医薬品の提供だけでは十分に果たすことができない課題にも取り組むことで、より高いQOL(生活の質)を世界中の多くの方々にお届けするというファイザーの取り組みを表現しています。

弊社は社会を構成している企業市民として、“真に実効性のある社会貢献プログラムは何か”という視点から社会貢献活動を展開しています。一方的な援助や一過性の支援ではなく、長期的な視野に立った継続的な活動になるようにと考え、経済的な支援のみならず、人的な支援やファイザーの多様な資源を活用した貢献を心がけています。特徴的な社会貢献活動として「ヘルスケア関連団体のネットワークづくりへの支援(VHO-net)」（患者団体などの相互連携の支援）、「ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援」（NPO等への助成）などがあります。また、2011年7月から日本トラウマティック・ストレス学会と共催させていただき、東日本大震災の被災地に向けた支援の一つとして、被災者のPTSD(心的外傷後ストレス障がい)の治療を支援することを目的とした、「東日本大震災 こころのケア支援プロジェクト」を展開しています。詳細は3ページ以降をご参照ください。

2011年の活動を報告するこの企業市民レポートで、ファイザーの社会貢献に関する考え方と活動についてご理解を深めていただけますと幸いです。今後も善き企業市民としての役割を果たすべく、社会貢献活動を継続してまいります。

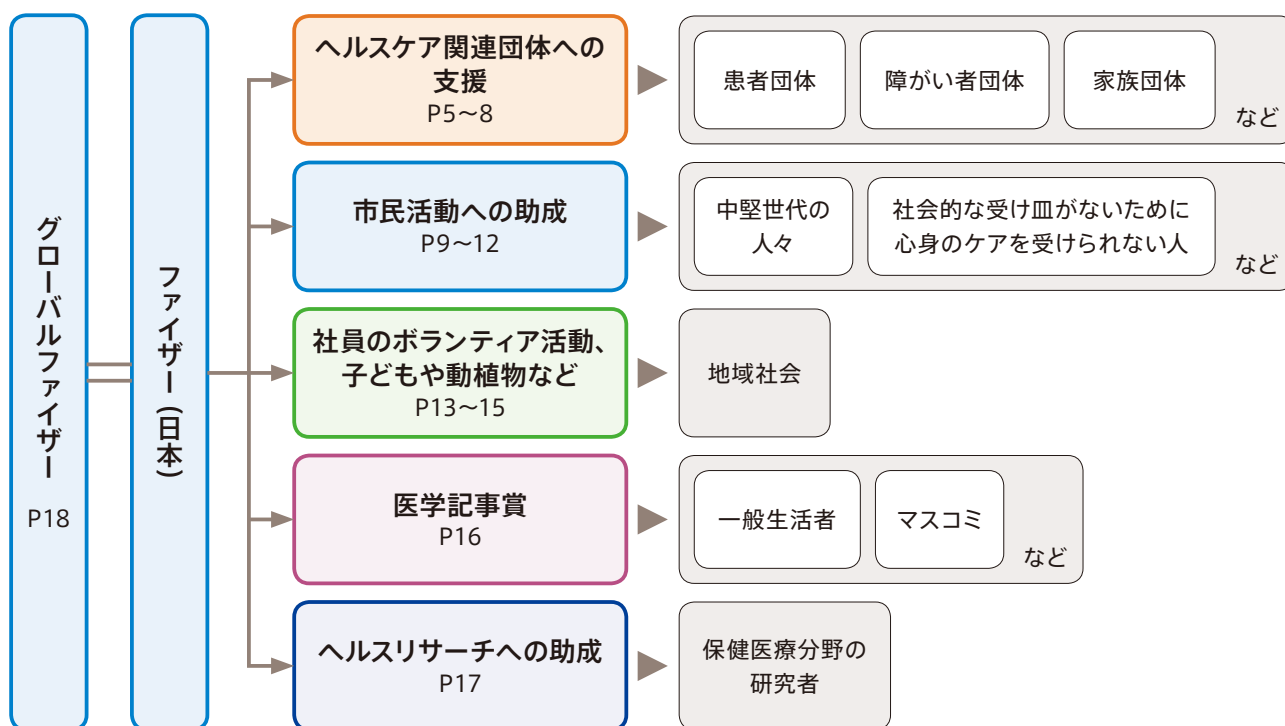
2012年3月
ファイザー株式会社 代表取締役社長
梅田 一郎

会社概要

設立	1953年8月1日
従業員数	5,856名
事業内容	医療用医薬品、動物用医薬品、農薬の製造・販売・輸出入
売上	5,592億円(2011年度)
所在地	本社：東京都渋谷区代々木3-22-7 新宿文化クイントビル

ファイザーの社会貢献活動の概要

ファイザーは、社会を構成している企業市民として“真に実効性のある社会貢献プログラムとは何か”という視点から社会貢献活動を考えてきました。その結果、すべての人が健康で心豊かに生きられることを目標に、患者さんや障がいのある方々、そのご家族、医療関係者だけでなく、市民団体、災害被災者等への支援など幅広い社会貢献活動を展開しています。



目次

ページ

- 1 — 「Working together for a healthier world より健康な世界の実現のために」
ファイザー株式会社 代表取締役社長 梅田 一郎
- 2 — ファイザーの社会貢献活動の概要
- 3 — 様々な被災地支援を実施、「東日本大震災 こころのケア支援プロジェクト」を中長期的に展開
- 5 — ヘルスケア関連団体(VHO)ワークショップとファイザーの支援活動
新たな10年、新たな展開を見つめて 第11回を迎えたヘルスケア関連団体ワークショップ
- 9 — ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援
特定非営利活動法人 ほっぶの森(宮城県)／特定非営利活動法人 子ども&まちネット(愛知県)／
12年間で総額5億2,555万円(274件)、国内最大級の規模の助成を実施
- 13 — 社員による社会貢献活動
マッチングギフトプログラム／ボランティア活動支援プログラム／
「災害支援ボランティア特別休暇制度」を創設／ファイザー・サマーサイエンス・スクール開校
- 15 — 植物の健康を守る 松枯れ防止の体験研修開催
- 16 — 医学・医療に関する優れた報道を表彰 第30回ファイザー医学記事賞
- 17 — 公益財団法人 ファイザーヘルスリサーチ振興財団による医師、研究者、医療関係者への研究助成
- 18 — Global Pfizer 世界各地で展開する企業市民活動

様々な被災地支援を実施、 「東日本大震災 こころのケア支援プロジェクト」を 中長期的に展開

東日本大震災の発生を受け、ファイザーは医薬品の提供をはじめ、義援金の寄付、社員によるボランティア活動の支援など様々な活動を行ってきました。代表的な取り組みの一つとして、地震、津波によって傷ついた被災者の心のケアを担う医療関係者を支援する「東日本大震災 こころのケア支援プロジェクト」を展開しています。



講演会の様子



震災後のメンタルヘルスについてのポスター

現地のニーズに沿った支援プロジェクト

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、被災した多くの方々の心に大きな傷を残しました。今後も、トラウマ体験による心的外傷後ストレス障がい (PTSD)、悲嘆反応、うつ病、アルコールなどへの依存、原疾患悪化など、精神医学上の問題への継続的な対応が求められます。そして、被災者の心のケアには、専門医、かかりつけ医や看護師を含め、現地のすべての医療従事者が極めて重要な役割を果たすことになります。

ファイザーでは、震災直後に被災者への心のケア

を継続的に支援することを決め、日本トラウマティック・ストレス学会との共催によって、岩手県、宮城県、福島県の医療従事者 (医師、歯科医師、看護師、薬剤師、心理士、保健師等) を対象に、トラウマケアの病態、診断、治療に関する講演会を継続的に行う「東日本大震災 こころのケア支援プロジェクト」を立ち上げました。また、本プロジェクトは日本医師会、国立精神・神経医療研究センターにご後援いただいています。

この講習会では、現地の医療従事者への事前アンケートによって現地のニーズに合ったテーマを設定し、阪神・淡路大震災を契機に創設された日本トラウマ



医療従事者向けの資料と患者さんや家族のためのパンフレット、ティック・ストレス学会の専門医などが講師を務めます。一方、ファイザーは現地の医師会、歯科医師会、薬剤師会などの協力をいただきながら、日程の調整や会場の設営、広報、資料やパンフレットの制作・配布など、事務局としての役割を担っています。

ニーズが無くなる日を目指して継続的に

2011年の講習会は3か所で計7回開催。2012年は約10か所で、それぞれ数回開催する予定です。心のケアには時間の経過とともに柔軟な対応が必要です。例えば、本プロジェクトの講演会のテーマ設定においても、震災後から間もない時期は、「被災者の心理的影響の基本的理解」「ストレスが睡眠に与える影響」「見えない不安への対処法」といったテーマが中心になりますが、時間が経つに従い「自己破壊的行動の対処法」「悲嘆反応とうつ状態への対処法」「こどものトラウマ反応とうつ状態への対処法」というように、現地の医療従事者のニーズに沿ったテーマに移行する工夫をしています。

このプロジェクトに中心的に関わるファイザープライマリーケア マーケティング本部学術情報グループ

高田雅史は、「講習会には毎回100名もの医療従事者の方々にご参加いただき、熱心にメモを取られたり活発な質疑応答も行われたりしています。参加者からは、継続的な支援を明確に打ち出したことで被災地が見放されていないという安心感がある、講師に質問したり、他の医療従事者と情報共有することで気持ちがりフレッシュされる、といった感想をいただいています」と語ります。

ファイザーでは、現地のニーズが無くなる日を目指し、今後数年間にわたり本プロジェクトを継続する予定です。

大震災に関する様々な支援と対応

本プロジェクトの他にも、ファイザー社(米国本社)は災害義援金として300万米ドル、日本法人と社員によるマッチングギフトによって1億円(13ページ参照)の寄付を行いました。また、2011年の夏には電力供給の低下に対応するため、使用電力削減にも積極的に取り組みました。例えば、7月1日から9月22日の間、本社ビルの各フロアを輪番ですべて閉鎖し在宅勤務を行う「フロア輪番停電」をいち早く導入しました。さらに、蛍光灯の半分を間引きしたり、オフィス利用時間の制限、オフィス・ドレスコードの緩和なども行い、オフィス消費電力を前年比で約30%削減しています。また、従業員による被災地でのボランティア活動を応援するため、災害支援ボランティア特別休暇制度を新設(14ページ参照)しています。

私達は今後も継続して、被災地への支援や使用電力の削減などに取り組んでまいります。



ヘルスケア関連団体(VHO)ワークショップと ファイザーの支援活動 (VHO:Voluntary Healthcare Organization)

新たな10年、新たな展開を見つめて 第11回を迎えたヘルスケア関連団体ワークショップ

疾病や障がいの違い、組織や団体の歴史や規模などを越え、様々な団体のリーダーが一堂に会し、互いの知恵を交換しながら共に課題に取り組んでいく全員参加型の集い「ヘルスケア関連団体(VHO)ワークショップ」が、2011年10月29～30日に都内のファイザー研修施設で行われました。



VHOワークショップの様子

震災被害者への追悼から始まった VHOワークショップ

「ヘルスケア関連団体ワークショップ」(主催:VHO-net)は、2001年、疾病や障がいの違いなどを越えた交流と新しいネットワークづくりを目指して始まりました。11回目となった今回のワークショップは、ファイザー代表取締役社長の梅田一郎による東日本大震災で被災された方々へのお見舞いの言葉から始まりました。

その後、1年間の事業報告では、一昨年まで全国8地域で開催されてきた地域学習会に、2011年4月に発足した四国学習会が関わったことが注目されました。

基調講演は、IIHOE(人と組織と地球のための国際研究所)の川北秀人代表による『「自分がしたいこと」ということではなく、『社会に求められること』のために、動き続けるチームをつくる!』という刺激的なテーマで、活動の公益性、目標と現実をどう埋めるか、活動資金の確保と組織の自立といった課題が提示されました。

期待される、社会に向けた これまで以上のアプローチ

午後の分科会では、9つのグループに分かれ、「もったくない! VHO-netの活かし方」というテーマで話し合いが行われました。過去10回のワークショップといくつかのプロジェクトなどの成果を踏まえ、今後の10年を視野に入れながら、個人、団体、そしてVHO-netというネットワークを活かして何ができるのかを構想するもので、各分科会とも4時間を超える議論となりました。

2日目は前日の議論を整理し、各グループによる10分間の発表と質疑応答があり、さらに午後からは全体討議が行われました。そこでは、これまで培ってきたネットワーキングによる個々の団体の活動の充実だけでなく、多様な疾患や障がいがある当事者、家族、支援者の集まりというVHO-netの特徴を活かした情報の集積と発信など、これまで以上に社会に向けたアプローチをどう組み立てていくかが話題になりました。10年という一つの区切りを付け、新たな展開を予見させる充実したワークショップでした。



分科会での議論の様子



VHOワークショップの様子



VHOのマスコットキャラクター「まねきねこ」

interview

「VHO-net」という新しい支援の形



増田 一世 (公益社団法人 やどかりの里 常務理事)

私は1978年から、精神障がいのある人達が地域で安心して暮らせるように支援をしている法人で働いてきました。しかし、精神科領域の中だけにいることに窮屈さも感じてきました。そうした時にファイザーが疾患の種類を越え、いろいろな人達と交流する仕組みを作ると聞いて参加することにしました。

他の疾患や障がいの話を聞くことはとても新鮮な体験でした。精神疾患の人達は、どの疾患でもそうかもしれませんが、自分の疾患が一番深刻だと思いがちです。でも、いろいろな人達がいろいろな病気と格闘しながら生きていらっしゃることを知り、大きな元気をもらったのです。

VHOには難病の方も多く、知らない難病がたくさんあることにも驚きました。そうした方の多くが福祉制度の谷間に落ち込み、何ら福祉的な支援が受けられないことも知りました。精神障がいも福

祉の谷間だと言われてきましたが、さらに別の谷間にいるのが難病の人達なのだとは勉強させていただきました。

社団法人の職員として仕事をしている私と、ボランティアで活動しているリーダーの方々とは違うこともあるかもしれませんが、しかし、どの方もそれぞれの家族会や患者会という立場を越えて付き合い合えるところが、VHO-netの特徴だと思います。障がいや難病を抱えている本人や家族は、共通して“生きづらさ”を抱えています。ここに集まっているリーダー達は、そうした“生きづらさ”を乗り越えて、広い視野で活動を続けているのだと思います。

この会が始まった当初は、ファイザーという企業と私達はどのような連携ができるのかわかりませんでした。いまではVHO-netのあり方を支えていることそのものが、企業の新しい支援のスタイルになっているのだと思います。

ヘルスケア関連団体(VHO)とネットワークづくりへの支援



疾病や障がいに関わる民間団体には「患者団体」「障がい者団体」「家族団体」「支援者団体」などがあり、それぞれが独立して活動しています。しかし、より良い医療や福祉を実現するには、こうした枠組みを越えたネットワークや交流も必要です。ファイザーはこうした団体を「ヘルスケア関連団体」(VHO)と位置づけ、それぞれの団体の自主性と主体性を尊重しながら、ネットワークづくりのサポートを行っています。

VHOのリーダー達が集まり、準備会によって決められたテーマに沿って話しあうVHOワークショップはその一つですが、その参加者の中から、地域における活動として関西地区で初めての地域交流会が生まれました。その後、同様の交流会が各地で行われ、参加者の関心や地域の課題に合わせた学習会へと変化していきました。現在では全国9地域で地域学習会が開かれ、その報告会も開催されています。

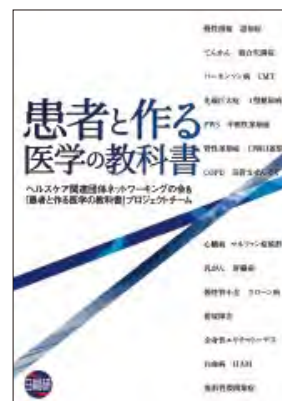
地域学習会からはいくつものプロジェクトも始ま

りました。「患者と作る医学の教科書プロジェクト」では、VHOのメンバーが中心となって25の疾患について患者の視点から見た疾患を伝える原稿を作成、医師や看護師などの監修を経て、2009年に「患者と作る医学の教科書」を出版しました。

「難病相談支援員教育研修プロジェクト」では、九州地区の難病相談・支援センターの相談支援員を対象に、相談支援員自身の心のケア、事例検討、教育研修を行っており、患者が日々の記録を記入する「受診ノート作成プロジェクト」も始まっています。

ファイザーは、ワークショップや地域学習会などの会場の提供、設営などの準備、交通費や宿泊費の負担、分科会の記録など、一方的な支援ではなく「ともに生きるための側面からのサポート」を心がけながら、事務局として活動を続けています。

「患者と作る医学の教科書」



「患者と作る医学の教科書」

ヘルスケア関連団体ワークショップ(これまでのテーマと概要)

- | |
|---|
| 第1回 [2001年] テーマ「活動に駆り立てるもの、越えるもの」～出会いを中心に～
常に課題を抱えている各団体のリーダーの悩みを共有することにより、横のつながりを持つ第一歩となりました。24団体52名が参加。 |
| 第2回 [2002年] テーマ「ひとりの気づきはみんなの気づき」～会の運営・後継者育成、資金調達、PR活動など～
役員のチームワーク、後継者の育成、活動資金の確保と運用、団体のPR活動について討論し、課題を共有しました。35団体60名が参加。 |
| 第3回 [2003年] テーマ「自分づくり、ひとづくり」～人材育成を中心に～
成功事例や問題点を共有化し、人材育成に関わる問題が様々な視点から討論されました。36団体78名が参加。 |
| 第4回 [2004年] テーマ「未来に向けて、充実と広がり」～今、あなたにできること～
医学教育については、この会をきっかけに地域学習会でも積極的に開催され、現在もその活動が続いています。40団体115名が参加。 |
| 第5回 [2005年] テーマ「つなぐ」～医療関係者とのより良い関係～
医師も参加し、医師・患者双方の立場から「双方のコミュニケーション不足」解決のため課題を共有しました。46団体79名が参加。 |
| 第6回 [2006年] テーマ「患者力」～医師とのパートナーシップ～
医師と患者のコミュニケーション不足を解決するために、特に「情報の収集、発信、共有」の重要性を認識しました。53団体78名が参加。 |
| 第7回 [2007年] テーマ「情報活用術」～収集と提供の方法を考える～
第6回のテーマをさらに具体化して、医療に関する様々な情報の見分け方や扱い方を話し合いました。57団体65名が参加。 |
| 第8回 [2008年] テーマ「つたえる」～正確な情報を伝えたい人たちに～
伝えたいことを、伝えたい人に、思ったとおりに伝えるにはどうしたらよいか? 情報の伝達について議論しました。52団体55名が参加。 |
| 第9回 [2009年] テーマ「つづける」～chance・challenge・change～
活動には追い風のときもあれば、向かい風のときもある。そのときどきにどう対処し、継続あるいは中止の決断ができたのかを話し合いました。40団体48名が参加。 |
| 第10回 [2010年] テーマ「集う・たのしむ・見つける」～これまでを振り返り、未来のために～
参加者、団体、VHO-netの10年間を振り返って現状と課題を整理し、今後の活動について話し合いました。53団体70名が参加。 |
| 第11回 [2011年] テーマ「もったいない! VHO-netの活かし方」
今後の10年の展望を考えながら、個人、団体、VHO-netを活かして何ができるのかを構想、整理しました。53団体69名、医療関係者13名が参加。 |

ヘルスケア関連団体(VHO)とネットワークづくりのための様々な支援

ワークショップ等の開催支援

VHO-net ワークショップ
地域学習会
地域学習会報告会 など

日常活動への支援

パソコン講習会
ウェブサイト制作サポート
勉強会 など

ネットワークづくりへの支援

ウェブサイトVHO-netの運営
サポート、情報誌「まねきねこ」の
制作・発行 など

ファイザーのコミュニティー・リレーション部は、年に1度開催されるVHO-net ワークショップや地域学習会、地域学習会合同報告会の開催などのほか、ヘルスケア関連団体の日常活動へのサポート、ネットワークづくりのための様々な支援を行っています。

●地域学習会の開催支援

2004年に関西地区で始まった地域交流会は地域学習会となり、年を追うごとに各地に広がりました。2011年には四国学習会も発足し、現在は全国9地域で開催されています。また、学習会を円滑に進めるためのファシリテーション支援も行っています。

●日常活動への支援

パソコン講習会

ヘルスケア関連団体の運営に必要なパソコンの習熟のため、5日間のパソコン講習会を開催。基本操作、会報やパンフレットの作成、表計算、パワーポイントの使い方などを学ぶ機会を設けています。

ウェブサイト制作サポート

ヘルスケア関連団体がウェブサイトの立ち上げやリニューアルを行う際には、制作会社や社内の制作専門家によるデザインやコンテンツ制作などを支援しています。

●ネットワークづくりへの支援

ウェブサイトVHO-netの運営支援

ヘルスケア関連団体ネットワーキングの会は、団体相互ヘルスケア関連団体(VHO)とネットワークづくりのための様々な支援の理解を深めるだけでなく、一般の方々にも広く各団体の活動を知ってもらうために、ウェブサイト「VHO-net」(<http://www.vho-net.org/>)を運営し、ワークショップ、各種勉強会の報告、情報誌「まねきねこ」と別冊(地域難病連など)

の情報を掲載しています。東日本大震災発生後は被災者支援団体リストを開設し、被災者支援を行っている団体と提供するサービス、場所、問い合わせ先などを閲覧できるようにしました。

2011年6月29日には全面的にリニューアルし、携帯でも閲覧できるようになりました。ファイザーはこのウェブサイトの運営を支援しています。

情報誌「まねきねこ」の制作・発行

ヘルスケア関連団体のネットワークづくりを支援するため、ファイザーコミュニティー・リレーション部の情報誌「まねきねこ」を制作・発行し、ヘルスケア関連団体、医師会、行政などに配布しています。また、ウェブサイト「VHO-net」からダウンロードすることもできます。



誌名の「まねきねこ」は、第1回ヘルスケア関連団体ワークショップで誕生したマスコットキャラクターで、人を招き、ネットワークを広げようという意味がこめられています。

ウェブサイトVHO-netのトップページ(上)と「まねきねこ」表紙

ファイザープログラム

～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援

ファイザーでは、「心とからだのヘルスケア」の視点を重視したより良い社会への寄与を目的として、公的機関のサービスや社会資源が十分に整っていない分野の活動を重点的に支援している市民活動・市民研究を応援しています。

ファイザープログラム2011年度【新規助成】

高次脳機能障がい者と
家族の支援ネットワークづくり事業

特定非営利活動法人 ほっぷの森

〔宮城県〕



理事長の白木福次郎さん(左)と副理事長の深野せつ子さん

ネットワークを第一歩として当事者と家族が 地域で普通に生活できるように

高次脳機能障がい^{*}は、外見からはわかりにくいだけに、周囲からの理解が得られず、障がいの当事者と家族が孤立しがちになる。仙台市で活動する、ほっぷの森が取り組むのは、障がいの当事者、家族をはじめ、県内の各地域の保健福祉事務所、拠点病院、就業・生活支援センター、福祉施設を巻き込んだネットワークづくりである。

ほっぷの森の設立は2007年。理事長の白木福次郎さん、副理事長の深野せつ子さんが、ボランティア活動で知的障がいのある人達と出会い、就労をサポートする「就労支援センターほっぷ」を立ち上げたことに始まる。実は、白木さんは、地元企業の経営者。知的障がい者の就職が厳しいなか、企業の視点で、専門の人材や仕組みを作る必要性を感じたのだ。その後は、実際の就労場所として、レストラン「びすた〜り」、さらにフードマーケットを開設した。

高次脳機能障がいの人達との出会いは、センターに就労支援講座を委託された時のこと。「2007年当時は、今よりもさらに、高次脳機能障がいに関する



漫画も入れ、高次脳機能障がいについてわかりやすく解説したハンドブックも作成

情報がない中で開講しましたが、知的障がいの人とも刺激を与え合って、高い出席率になりました」と白木さん。一方で、この障がいの難しさも認識し、別の機関の助成を受け、支援事業も開始させた。1年目は、当事者と家族の実態調査、2年目は、県内の7つの圏域での講習会の開催とハンドブックの作成を行った。ところが、最終年度の2011年、仕上げとなる本格的なネットワークづくりを始めたところに、東日本大震災が起きた。

当然、計画は進まず、出前の講習会などを行うとともに、事業を完成させる方策を探している時、偶然、HPで知ったのがファイザープログラムの助成だった。

ただ、震災は新たな課題を発見し、一步踏み出す機会にもなったと深野さんは言う。「医療現場も巻き込み、活動を広げようとしています。当事者が地域の中で困っていることを改善し、普通の生活をするために、ネットワークづくりはスタートなんです」。

※交通事故や病気(脳出血、脳梗塞等)などのため脳の一部に損傷を受け、言語、記憶、注意などの認知機能に障がいが生じ、日常生活や職業に様々な障がいを来している状態。身体的な後遺症がない限り、外見上障がいのあることがわかりにくい。



障がいのあるスタッフもいきいきと働けるレストラン「長町遊楽庵 びすた〜り」

ファイザープログラム2011年度【新規助成】

発達に障がいのある
子ども・若者のための心とからだの講座

特定非営利活動法人 子ども&まちネット [愛知県]



理事長の伊藤一美さん(左)と副理事長の田中弘美さん

障がいがあっても、それぞれのやり方で 社会と関わりながら暮らせるように

子ども&まちネット(通称・子まち)は、名古屋市および愛知県下の子育てやまちづくりに関わる団体をつなぐネットワーク組織である。子どもが育つためには、地域社会の大人が見守る環境が大切であり、そのためにはまず大人同士が知り合うことが必要であると、様々な団体で活動していた50人ほどが集まって2000年に設立された。「当初は、各団体が知り合うことを目的に研修会やフォーラムを開いたり、会報で団体紹介をしていましたが、2005年に法人格を取得し、徐々に“子まち”としての活動も本格的に行うようになりました」と、伊藤一美理事長。

その一つが、発達に障がいのある子ども・若者向けの教育プログラムである。とすれば、福祉を受けるだけの存在として社会から隔絶されがちな障がいのある子どもや若者に、パソコンやマナーなどの技術や自立への気持ちを育て、就労を目指してもらおうものである。「障がいのある子どもの父母ネットワーク愛知」の代表であり、“子まち”の副理事長でもある田中弘美さんが中心となって進めている。今回の助成対象である



プレーパークで遊ぶ子どもたち

「心とからだの講座」は、このプログラムの一つである。

思春期を迎えると誰でも心とからだのバランスが不安定になるが、障がいによっては自分の気持ちを表現したり、相手の心を受け止めることが苦手なため、誤解によるトラブルに巻き込まれやすい。講座では、「自分のからだの変化を知る」「自分を大事にし、相手も大切にすること」などを教え、人を好きになるのは素晴らしいことだと伝える一方、ロールプレイングゲームで「好きな気持ちを告白する」「断られる」といった体験を重ねる。

2012年は、“子まち”のメンバーである心理学者と協力して講座の効果を検証しながら、教材の開発を行う。「愛や性の問題は誰にとっても大切ですが、障がいのある子どもの場合、親も先生もとまどうことが多く切実です。『心とからだの講座』も含めて新しい教育プログラムを開発することで、障がいのある子どもや若者が隠れた能力を発揮し、一人ひとりに合ったやり方で社会と関わっていけるようになってほしいと思います」(田中さん)。



愛や性についての講座の様子

ファイザープログラム

～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援

12年間で総額5億2,555万円(274件)、国内最大級の規模の助成を実施



支援団体の活動内容の発表の様子

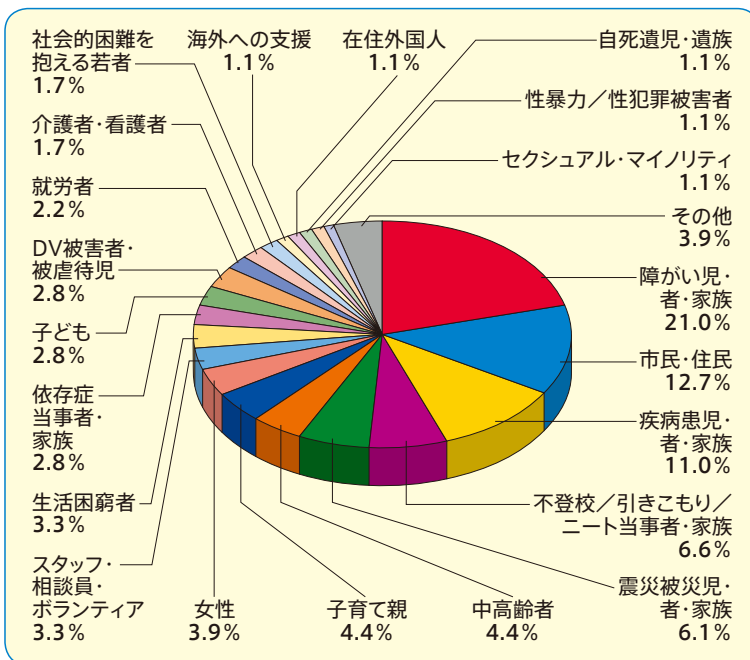
社会貢献活動の一環として2000年に創設されたファイザープログラムは、「心とからだのヘルスケア」の領域に関する市民活動・市民研究を助成しています。ここでいう「ヘルスケア」は、“健康管理”という意味でなく、保健・医療・福祉・生活を一体とした充実した人生に関するケアとして捉えています。

支援団体の選考にあたっては、公的機関からのサービスが得にくい活動や社会資源が十分でない分野への支援、プロジェクトの独創性や試行性などを重

視しています。また、最長3年間の継続助成制度、人件費や事務局経費も助成対象とするしくみなどを先駆的に導入し、助成団体が自立できる支援を目指しています。

2011年度の助成団体は新規が12件(総額2,801万円)、継続が11件(総額2,000万円)で、助成総額は4,801万円となりました。2011年12月16日にファイザーの本社ビルで開催された「2011年度ファイザープログラム贈呈式」では、すべての支援団体が活動内容と支援プロジェクトについて発表を行いました。

ファイザーはこれまで12年間に、延べ3,052件(新規2,851件、継続201件)の応募の中から、新規助成・継続助成合わせて274件のプロジェクトに対し、5億2,555万円の支援を行ってきました。これは企業による市民活動支援としては国内最大級の助成規模です。



参加した皆さん

「ファイザープログラム」2011年度助成対象プロジェクト一覧

新規助成(助成1年目)

	活動	研究	プロジェクト名	団体名	所在地	助成額(万円)
1	●		つなげよう!ひろげよう!子ども達の笑顔のリレープロジェクト	ばん・ばん・ばんぶきん	北海道	203
2	●		震災に負けないで!～震災による自殺を防ごうプロジェクト	岩手自殺防止センター	岩手	208
3	●	●	高次脳機能障がい者と家族の支援ネットワークづくり事業	特定非営利活動法人 ほっぶの森	宮城	250
4	●		薬物・アルコール依存症者の自立支援および就労プログラム開発モデル事業	特定非営利活動法人 潮騒ジョブトレーニングセンター	茨城	200
5	●	●	外国人相談に従事する相談員のためのメンタル・ヘルスケア支援体制構築事業	特定非営利活動法人 ASIAN PEOPLE'S FRIENDSHIP SOCIETY(A.P.F.S.)	東京	278
6	●		セクシュアル・マイノリティのための無料電話相談・直接支援プロジェクト	共生社会をつくるセクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク	東京	280
7	●		性犯罪被害者の自立のための交流会づくり	みかつき委員会	東京	162
8	●	●	「美術と手話」～ろう者とつくる美術鑑賞プログラムと美術用語の手話化事業	特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン	東京	250
9	●		発達に障がいのある子ども・若者のための心とからだの講座	特定非営利活動法人 子ども&まちネット	愛知	297
10	●		若年で発症した認知症患者のための「つどい」の場作り普及充実活動	特定非営利活動法人 認知症友の会	京都	150
11	●		釜ヶ崎における困難者の居場所づくりといきがい事業	特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋	大阪	275
12		●	盲ろう者のストレス軽減のためのリサーチと方策の検討	特定非営利活動法人 視聴覚二重障害者福祉センターすまいる	大阪	248
助成総額(12件・合計) 2,801万円						

・(2011年度の助成期間は、2012年1月1日～12月31日です)

継続助成

	活動	研究	プロジェクト名	団体名	所在地	助成額(万円)
助成2年目						
1	●		「農業の力」でニート・ひきこもりの若者を元気にするプロジェクトver.2.0	山形県新規就農者ネットワーク	山形	76
2	●		「見た目問題」ネットワークの構築・拡充および情報発信	特定非営利活動法人 マイフェイス・マイスタイル	東京	200
3	●	●	東京プロジェクトー医療・福祉の支援が必要なホームレス状態の人々の精神と生活向上ー	特定非営利活動法人 メドゥサン・デュ・モンド・ジャボン(世界の医療団)	東京	180
4	●		脱暴力プログラムの啓発事業	メンズカウンセリング協会	京都	86
5	●		刑務所を出所した薬物依存症者の包括的な回復支援プロジェクト	フリーダム	大阪	300
6		●	大人になった自死遺児の聴き取り調査～親の思いを聴き取る～	カウンセリングスペース「リヴ」	大阪	140
7	●		不登校・引きこもりなどの子どもを持つ保護者へのストレスケアプロジェクト	特定非営利活動法人 フリースクール風の里	福岡	200
8		●	性的虐待体験者が性産業で働く理由とその実態調査～支援編	特定非営利活動法人 女性ヘルプネットワーク	福岡	278
助成3年目						
9	●		高齢聴覚障がい者、盲ろう者の話し相手、コミュニケーション体制の充実事業	特定非営利活動法人 ひびきの会	岩手	200
10	●	●	全国のエイズ治療拠点病院に関する情報整備および情報提供	特定非営利活動法人 日本HIV陽性者ネットワークジャンププラス	東京	200
11	●	●	野宿生活者の自立支援の一環としての歯科支援活動	歯科保健研究会	大阪	140
助成総額(11件・合計) 2,000万円						

・(2011年度の助成期間は、2012年1月1日～12月31日です)

社員による社会貢献活動

ファイザーは会社として社会貢献活動に取り組む一方、社員一人ひとりの社会貢献への気持ちを応援するために、「マッチングギフトプログラム」「ボランティア活動支援プログラム」といった制度のほか、全国各地の事業所が地域と協力して行うボランティア活動も応援しています。その一部を紹介します。

社員の寄付金に会社が同額を上乗せして届ける「マッチングギフトプログラム」

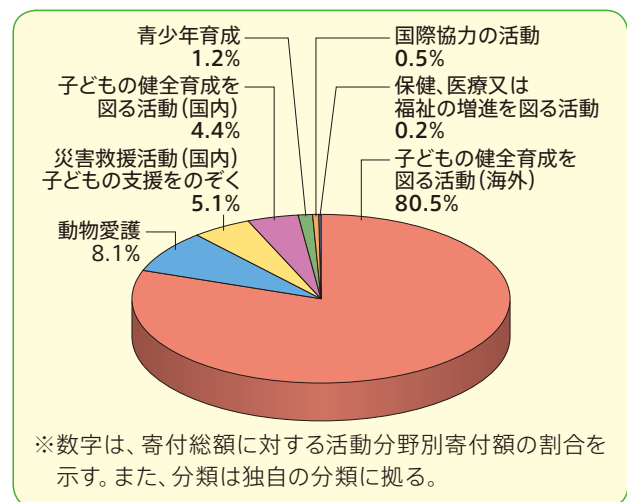
災害支援マッチングギフトプログラムは、社員から寄せられた義援金に会社が同額を上乗せすることにより、社員の善意を2倍にして被災地域の最前線の救済活動を支援するものです。1999年にトルコ地震が起こった時に、ファイザートルコの社員が献身的な救助活動を行っていることを知った社員から湧き上がった、「何か応援したい」という声をきっかけに始まりました。毎年のように発生する世界の災害に対し、2011年度までに総額1億9,220万円をお届けしました。このうち1億円は、東日本大震災の被災地への支援です。

社員のボランティア活動を年間10万円まで応援「ボランティア活動支援プログラム」

「ボランティア活動支援プログラム」は、社員が半年以上続けているボランティア活動に対して、備品や

機材の購入、イベント開催の事業費などに年間10万円を限度として助成を行うものです。現場で、本当に必要とされていること・モノを調えることで、社員がより積極的、より効果的にボランティア活動に参画できるよう応援します。

2011年度マッチングギフトプログラム寄付先団体（活動分野別・出費割合）



ファイザー自然災害義援マッチングギフトキャンペーン寄付金一覧

名称	発生日月	社員寄付金額	会社寄付金額	寄付総額
トルコ北西部地震	1999年8月17日	¥2,130,399	¥2,130,399	¥4,260,798
台湾中部地震	1999年9月21日	¥1,911,444	¥1,911,444	¥3,822,888
インド西部地震	2001年1月26日	¥2,041,591	¥2,041,591	¥4,083,182
米国同時多発テロ	2001年9月11日	¥5,574,213	¥5,574,213	¥11,148,426
アルジェリア北部地震	2003年5月21日	¥639,629	¥639,629	¥1,279,258
イラン南東部地震	2003年12月26日	¥1,506,750	¥1,506,750	¥3,013,500
新潟県中越地震	2004年10月23日	¥5,890,466	¥10,000,000	¥15,890,466
スマトラ沖地震津波災害	2004年12月26日	¥6,834,470	¥8,165,530	¥15,000,000
ハリケーン・カトリーナ災害	2005年8月23日	¥2,906,023	¥2,906,023	¥5,812,046
パキスタン地震	2005年10月8日	¥2,395,318	¥2,395,318	¥4,790,636
ジャワ島中部地震	2006年5月27日	¥1,941,405	¥2,058,595	¥4,000,000
新潟県中越沖地震	2007年7月16日	¥1,294,248	¥1,505,752	¥2,800,000
カリフォルニア南部山火事	2007年10月8日	¥859,060	¥940,940	¥1,800,000
サイクロン「ナルギス」&四川大地震	2008年5月2日、12日	¥2,648,839	¥3,351,161	¥6,000,000
フィリピン台風「ケツァーナ」&スマトラ西部パダン沖地震	2009年9月26日、30日	¥1,118,073	¥1,881,927	¥3,000,000
ハイチ大地震	2010年1月13日	¥2,725,125	¥2,774,875	¥5,500,000
東日本大震災	2011年3月11日	¥45,932,658	¥54,067,342	¥100,000,000
合計		¥88,349,711	¥103,851,489	¥192,201,200

東日本大震災の復興のために 「災害支援ボランティア特別休暇制度」を創設



横浜中央オフィスの社員が参加したボランティア活動
(写真提供:社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会)

ファイザーは2011年5月1日、東日本大地震の被災地・被災者支援を目的とするボランティア活動に従業員が参加する際、最大5日間の特別休暇を付与する「災害支援ボランティア特別休暇制度[※]」を創設しました。これは、ボランティアに参加する意思を持ちつつも躊躇している従業員や、参加する方法がわからな

い従業員を支援する制度です。

7月に岩手県釜石市に赴いた横浜中央オフィスの堺章吾、正来理香らは、川の草刈り、倒壊家屋の瓦礫選別のボランティアを行いました。活動を終えた正来は「家の跡から日用品や写真等、被災前の暮らしがわかる品物がたくさん出てくると、本当に胸が詰まる思いだった」、堺は「改めて人と人とのつながりの大切さを確認した。ボランティアはすべて自己責任ですが、もっと多くの方に参加してほしい」と語っていました。



※ボランティア休暇制度の取得には、①全国社会福祉協議会、NPO、NGO、災害ボランティアセンターが主催する支援活動であること、②ボランティア保険に加入する必要があります。

小学生に錠剤を作ってもらい薬の構造、安全性を知ろう!!

2011年度 ファイザー・サマーサイエンス・スクール開校(名古屋工場)

愛知県武豊町にあるファイザーの名古屋工場では、2000年から毎年夏に小学生を対象に科学の不思議、面白さを伝えるサマーサイエンス・スクールを開催しています。今回も町内の小学5・6年生を対象に2011年7月2日に開催しました。75名の募集をしたところ、受付開始後あっという間に定員が埋まってしまうほどの人気イベントになりました。

今年の科学実験のテーマは「錠剤を作ろう」。製薬企業の工場で実際に作っている錠剤がどの様に見えるのか? 錠剤は自分でも作れるのか? 薬についての安全性は? などについてサマーサイエンスを通して小学生に学んでもらいました。

今回初めての実験のため小学生が安全に実験を進められるかとても心配でしたが、ボランティア先生(社員)と小学生のコミュニケーショ

ンがとても良く、見事クリア。終了後には参加者から「すごく楽しい思い出になりました」「錠剤の仕組みがよくわかりました」「薬の安全性がわかりました」「またサイエンス・スクールに参加したい。サイエンス・スクール最高」などのコメントがあり、大好評でした。



ボランティア先生(社員)と子供達全員で

松枯れから美しい海岸林を守れ! —松枯れ防止の体験研修開催

ファイザーでは、人間はもとより、動物や植物に対するQOLの向上にも取り組んでいます。中でもユニークなものとして、松枯れ防止の薬剤も取り扱っています。



樹幹注入の講習をファイザー社員から受ける参加者の皆さん



センチュウを顕微鏡で観察する子供達

古来、松は、詩歌や俳句に詠まれ、絵画に多く描かれるなど、日本人の精神風土と深く関わり、また、土砂災害、風雪害、潮害などから人家や農地を守るために、先祖によって各地に植えられてきました。

そのような私たちの生活に欠かせない松ですが、2010年林野庁発表の都道府県別松くい虫被害量報告によれば、北海道、青森県以外のすべての都道府県で松枯れが発生し、次世代に残すべき大切な松が全国各地で危機に瀕しています。

ファイザーは日本の風景に欠かせない松を守るために各地で活動を展開しているボランティアや住民団体、地域社会の方々に、講師を派遣して松枯れのメカニズムや現状を説明し、松枯れを予防するファイザーの薬剤「グリーンガードファミリー」を提供しています。

2001年に始まったこのプログラムを通じて薬剤を提供した地域は30か所に及んでいます。

2011年2月20日に、このプログラムの一環として、石川県能美市根上翠が丘運動公園海岸林において松くい虫被害対策研修会が開催されました。

能美市には、旧町名である根上町の由来にもなった、「根上の松」と呼ばれる松の根が地上に露出した、古くは「義経記」にも登場する歴史ある松が観光名所となっています。市内の約6キロにわたる海岸沿いで

は2004年から松くい虫被害が目立ち始め、根上山周辺では少なくともこれまでに約4千本が伐採されています。現状のままでは松林がなくなってしまうと思われるほどの激害地です。そこで、昨年度から地元の方々が「いしかわ能美の松原サポートクラブ」を設立し、植樹などの松林整備活動を実施しています。

研修会当日は天候にも恵まれ、「いしかわ能美の松原サポートクラブ」メンバーのほか、松林保全や植樹に取り組む団体、子供達を中心に約70名が参加しました。石川県職員、能美市職員も加わり、官民一体となって、自分達の松林を守ろうという意気込みが感じられました。

まず、ファイザー社員が講師となって、室内で松の大切さや松枯れの仕組みについて学習し、病気の原因となるセンチュウの観察も行いました。屋外実習では実際に松枯れ予防剤を樹幹注入していただきました。

今後も松枯れから松を予防し、地域社会を応援するために、そして日本の風景から大切な松がなくならないように、活動を続けていきます。

参考ウェブサイト

<http://www.greenguard.jp/>

第30回ファイザー医学記事賞

ファイザーは医学・医療の現実が、広く一般の方々に正しく理解されることを願い、医学・医療記事を表彰する日本で唯一の賞、ファイザー医学記事賞を設けています。これまでの受賞記事は164点、約50点が単行本として出版されています。

第30回を迎えたファイザー医学記事賞は、2010年度の医学・医療関連記事103点の中から、大賞1点、優秀賞5点が選ばれ、2011年9月26日に発表と贈呈式が行われました。

大賞を受賞した朝日新聞社『ニッポン人・脈・記 「がん その先へ」／「Dr.コトーを探して」』の「がん その先へ」は、がんを経験した記者がその体験を通して出会ったがん患者の方々やそのご家族の姿を描いています。審査員からは、「後から来る患者さんのために尽力した人々の姿を一つひとつが読み物になるようなタッチで描いており素晴らしい」とのコメントがあり、選考基準の中でも「感動がある」と高く評価されました。

「Dr.コトーを探して」は、離島医療に携わる医師を

追った記事で、日本の僻地医療の課題を浮き彫りにすると同時に、「医師と島の人々の交流など、まるで映像が浮かぶような作品」と評されました。

東日本大震災という未曾有の危機に直面している日本にあって、緊急災害時の医療支援のあり方、被曝医療の課題、被災した方々の健康問題、体だけでなく心のケアの必要性など、医学・医療の抱える課題は数多くあります。そのため、例年にも増して医療や健康への関心は高く、医学記事への要望や期待も大きくなってきています。今後も医学・医療記事が患者さんや一般の方々をはじめ、医療に携わる方々の指針ともなり、また誰もが健康で安心して暮らしていくための重要なガイドとなるよう、当賞を継続していきます。

第30回ファイザー医学記事賞 受賞記事

2010年4月から2011年3月までの間に、一般の読者を対象とした全国の新聞に掲載された医学・医療関連記事を、(1)着眼点、(2)構成、(3)的確でバランスのとれた情報、(4)啓発性、(5)感動・説得力の5つの観点から評価し、受賞記事を選定しました。

大賞 『ニッポン人・脈・記 「がん その先へ」／「Dr.コトーを探して」』

(朝日新聞社 上野 創、生井 久美子)

優秀賞 『お〜い がんよ ルポ 患者・医療者の「今」』

(熊本日日新聞社 編集委員 春木 進)

優秀賞 『命 贈られて』

(産経新聞大阪本社 袖中 陽一)

優秀賞 『安心のゆくえ 地域発医療再考』

(山陽新聞社「安心のゆくえ」取材班)

優秀賞 『地域で支える 一重症心身障害児の在宅ケア』

(信濃毎日新聞社 磯部 泰弘)

優秀賞 『それぞれの歩幅で ～発達支援を考える～』

(琉球新報社「発達支援を考える」取材班)

(五十音順・敬称略) 受賞者の皆さん



医師、研究者、医療関係者に向けて累計644件、総額16億円の研究助成

ファイザーは、1992年3月、ヘルスリサーチの調査・研究・振興のために基金を拠出し、ファイザーヘルスリサーチ振興財団を設立しました。以来、国際的な視点からの様々なプロジェクトへの助成、研究者の国際交流の場を提供しています。

進んだ医療技術を必要としている人に適切に提供できる仕組みをつくるためには、現在の医療システムの問題点を探り、どう解決し、医療現場の改革や保健医療政策・立案にどのように反映させていくかを考えなければなりません。

ヘルスリサーチは、一人ひとりのQOL(生活の質)の向上を目指し、すべての人が必要な時に最高の医療・福祉を少ないリスクで受けるための社会システムづくりを研究する問題解決型の学問です。

ファイザーヘルスリサーチ振興財団では、研究助成として現在まで累計で644件、総額16億円を研究者に助成し、その研究成果をわが国の保健医療福祉の向上に役立てています。

2011年度の研究助成は国際共同研究8件、国内共同研究21件の合計29件で、総額4,420万円でした。

発展するつながりと成長のきっかけ 第8回ヘルスリサーチワークショップ

ファイザーヘルスリサーチ振興財団はヘルスリサーチの土壌をつくるため、医療関係者だけにとどまらない多彩な人材による“出会いと学び”を目的とするワークショップを2005年から開催しています。「誰かが教えてくれる研修会ではなく、異分野の方々による討

これまでの助成金採択者の一覧は
下記ホームページをご参照ください。

http://www.pfizer-zaidan.jp/fo/business/research_grant/sponsorship/

議を通じてお互いの新たな“気づき”を重視し、参加する一人ひとりが楽しみながら、“何か”を始めるためのお手伝いをするための集まり」がコンセプトです。

2012年1月28～29日に行われた第8回のワークショップでは、『ヘルスリサーチは何を創造できるか ～20年後の持続可能な社会に向けて～』をテーマに特別講演：南研子氏(熱帯森林保護団体代表)、基調講演：遠藤久夫氏(学習院大学経済学部教授)、武藤真祐氏(祐ホームクリニック理事長)、その後パネルディスカッションを行いました。これらを受けて2日間にわたって「ワールド・カフェ方式」による分科会で、参加者が工夫を凝らしたワークショップが熱心に展開されました。参加者同士、またスタッフも一緒に「楽しみながらお互いが学び合い」、参加者自身の“気づき”や“成長”のきっかけを得るという目的を達成することができました。

今後もさらに工夫を凝らして、自立した若手研究者の問題解決型の支援の場にしていきたいと考えています。



パネルディスカッションの様子

Global Pfizer

世界各地のファイザーが独自に展開している社会貢献活動に加え、各国政府やNGOなどと提携しながら継続して、HIV/AIDS、がん、失明の原因となるトラコーマ対策などに取り組んでいます。ファイザーのグローバルな企業市民活動の一部を紹介します。



HIV/AIDS、マラリア、結核の予防や処置のために

感染症研究所

HIV/AIDS、マラリア、結核の予防や処置のトレーニングのため、ウガンダ共和国に感染症研究所 (IDI) を設立し、2004年以降、27か国から訪れた約6,500人の医療従事者がここで学んでいます。また、これまでに3万人以上のHIV/AIDS患者さんのケアを行ってきました。

がんの発見と治療、禁煙に取り組むために

グローバル・ヘルス・パートナーシップ

がんのコントロールや禁煙活動の世界的なモデルの構築のため、45か国以上の国々で31のパートナーシッププログラムをサポートしています。がんの早期発見を目的とした標準的なスクリーニングの構築、がん治療を支援するNGO組織の能力向上、禁煙のためのネットワークの構築サポート、医療者の育成、禁煙の奨励、非喫煙者に対する受動喫煙からの保護などを進めています。

途上国のHIV/AIDS 感染症治療のために

ジフルカン・パートナーシップ プログラム

HIV/AIDSの患者さんがかかりやすい日和見感染症の対策として2001年に南アフリカでスタートしたこのプログラムは、発展途上国の政府やNGOに治療薬ジフルカン(フルコナゾール)を寄付するとともに、現地の医療関係者に診断と治療のためのトレーニングを行っています。これまでに63か国、2,400以上の地域に12億米ドル以上の医薬品を提供しています。

世界最大の失明の原因トラコーマ撲滅のために

インターナショナル・トラコーマ・ イニシアティブ

伝染性の眼病・トラコーマを撲滅するには、公衆衛生の改善や地域の保健教育、抗菌薬による治療などが必要です。ファイザーは1998年、Edna McConnell Clark 財団とインターナショナル・トラコーマ・イニシアティブ(ITI)を設立。世界19か国2億2,000万人以上の患者さんに抗菌薬ジスロマックを提供。総合的な対策にも取り組んでおり、モロッコでは2006年にトラコーマの撲滅に成功しました。



Working together for a healthier world™
より健康な世界の実現のために



企業としての、また社員としての活動の基盤に、9つのバリュー(価値規準)があります。

ファイザーは、社員が遵守すべき9つのバリュー(価値規準)を掲げています。私たちは、この価値規準に則った活動こそが企業の成長発展の源であると考え、日々の事業活動がバリューに基づいているかどうかを常に見直し、実践しています。

バリューの一つである“Community(善き市民)”は、「私たちが働き、生活している全てのコミュニティーをより良くするために、積極的な役割を果たします」というものです。

ファイザー株式会社

〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7 新宿文化クイントビル 対外広報部

www.pfizer.co.jp